

## 生徒が主体的に表現力の高まりをめざすための 言語活動の明確化と充実とは

浦田 栄信 吉崎 理香 岩城 廣和

英語は、教科そのものが言語を習得するための教科である。授業の中で行う「読むこと」「書くこと」「聞くこと」「話すこと」、これら4つの技能を育成するための活動のすべてが言語活動と言ってよい。ここでは、授業の中で、どのような言語活動が生徒の主体性を高め、英語という手段を通じて自己表現力を高めていくことができるか、実践例とともに紹介していきたい。

### I 本校英語科のめざすもの

本校英語科では、英語という道具を用いた自己表現力の育成を目ざしてきた。表現力には二つの側面があると考えている。ひとつは、挨拶などの慣用句や定型表現を使ってコミュニケーションをスムーズに行う力である。もうひとつは、日本語を介して思考・判断したものを英語で表現する力である。生徒にとって、あいさつや慣用的表現は、日本語に置き換える必要がなく、学習が進むにつれてその表現は少しずつ増えていく。しかし、生徒が「これを表したい」と思うことの多くは、日本語で思考したことを英語に置き換えるというステップを踏んでいる。本校英語科では、この日本語から英語への変換という思考過程をとまなう言語活動を中心に研究を進めている。本校の研究副題に掲げている「課題学習における言語活動の明確化と充実」に関して、研究1年目にあたる平成23年度は、24年度からの学習指導要領の完全実施に伴い、言語活動のねらいと方法、関連性、そして3年間を通して最終的に育てたい生徒の姿を明確にすることに重点を置き、各学年の年間指導計画を作成し直した。また学習過程を仕組んでいく中で、言語活動の明確化を図ることは、同時に表現力の質的な向上に目を向けることにもなり、言語活動の充実化を図ることにつながるのではないかということが、成果として見えてきた。

### II 非母国語を介した自己表現力

英語で「話す」「書く」という自己表現を行おうとす

るとき、生徒は壁にぶつかることが多い。表現したいことが、自分の思うように表現できないという壁である。英語が非母国語であるために、生徒が表現したいことが既習事項で表現できるか、という問題が生ずるのである。主体的に学習に取り組む生徒ほど、そのギャップに戸惑いを感じるだろう。そこで、中学校英語という段階では、生徒が英語で表現したい、伝えたいという思いや、英語で表現しなければならない場面において、既習の表現を活用したり、他の生徒が考えた表現を取り入れたりしながら英語で表現する力を自己表現力とし、育てていく力とした。後述していく言語活動は、この表現力を伸ばしていくためのさまざまな実践である。

### III 言語活動の要素と種類

まず、言語活動には3つの要素が必要である。「動機」「使用場面と言語の働き」「言語材料」である。この3つがうまく機能すれば、充実した言語活動となる。

次に、英語科における言語活動には、大きく分けて2つの種類があると考えられる。学習指導要領には、3年間を通じた全体的な配慮事項の第1に、次の項目がある。

(ア) 実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動を行うとともに、(3)に示す言語材料について理解したり練習したりする活動を行うようにすること というものである。

本校英語科では、前者を活用型の言語活動、後者を習得型の言語活動と呼んでいる。先に挙げた言語活動に必

要な3つの要素は、習得型・活用型の両方の言語活動に必要なものであるが、習得型の言語活動では、主に「言語材料」という要素が中心となり、また、活用型の言語活動では「使用場面と言語の働き」という要素が中心になってくる。習得型の言語活動と活用型の言語活動には具体的にどのようなものがあり、それらがどのような力(思考力・判断力・表現力)をつけるのかを明確にしていきたい。

#### IV 英語科における思考力・判断力・表現力とは

英語科における思考力・判断力・表現力とは、英語を読んだり、聞いたりした内容について考え、学習した語彙や文法等の中から適切なものを判断・選択し、話したり書いたりして表現していく力である。

他から受けとった情報に関して考えたり、まとまりのある英文を作ろうとしたりするとき、生徒はまず日本語での思考を行う。通常その部分は内在化しており、外からは見えないが、授業ではマッピングや図・表などを使って可視化するというステップを用いることがある。

しかし、こうして生み出された個々のアイディアがすべて英語で表現できるわけではない。内容の濃い、優れた思考がなされていても、それを英語でどう表現できるかを判断しなければならない。そこで、生徒は日本語で思考した内容を、既習事項を使って表現できないか考えたり、英語独特の表現や段落構成に当てはめたりする。こうして生徒は、日本語を介して思考した表現したいことと英語を介して表現できることの合致を図る学習活動を繰り返し授業の中で行っていくことで、これまで学んできた表現を使う場が増え、定着が強化されることが期待できる。また、どうすれば表現したいことが英語で表現できるかを判断するスピードも上がることが期待できる。

また、話したり、書いたりする表現活動には、メッセージを伝え合う「他者」の存在が不可欠である。「他者」が、自分の気がつかなかったことを気づかせてくれるからである。授業の中では、英語での表現力を高めていくために、ペアやグループでの話し合い活動を行う。「読

み手」や「聞き手」の立場からスピーチ原稿や英作文を読み合って、より分かりやすい語彙や表現はないかを考えたり、全体でのスピーチ発表の前に、グループ内でスピーチの仕方についてアドバイスし合ったりすること等を本校では積極的に取り入れている。

#### V 言語活動と課題学習

前述したとおり、言語活動には「動機」「使用場面と言語の働き」「言語材料」という3つの要素が必要である。習得型・活用型いずれの言語活動にも大きく影響を与えるのが、生徒の学習「動機」である。教師側に教えたいこと、生徒にさせたいことがあっても、生徒自身に「やってみたい、学びたい」という気持ちがなければ言語活動は充実したものにはならない。生徒の主体性を高めるためには、本校が取り組んできた課題学習が有効である。英語科では、生徒を主体的な学習へと向かわせるために、まず生徒が言語の使用場面を自分自身の問題(追究・解決されるべきもの)ととらえ、言語の使用場面が生徒の必要感や切実感を促すものとなるよう、生徒の問題意識を課題意識まで高めていくことが必要であると考えている。例えば、自己紹介スピーチをさせる場合、教師側から単に「自己紹介をしよう」という活動を提案するのは、英語で自己紹介をさせたいという教師の思いや、ひととおり英語で自己紹介ができたという結果のみに着目していることにはならないだろうか。「英語で自己紹介できる」という生徒がたどり着くゴールに、「自分の良さが伝わる自己紹介とはどのようなものだろうか」と考えさせるステップがあるだけでも、生徒達はどうすればより相手に自分のことを知ってもらえるだろうかという課題意識をもつ。このように、言語活動の過程に課題意識を持たせるような工夫をすることで生徒が意欲的に活動に取り組むようになり、表現の高まりや質の向上を期待することができる。

#### VI 言語活動実践事例

本校英語科の研究で大切にしている活用型の言語活動の実践例をいくつか紹介したい。

### 【実践例①】

「より長く豊かに会話させるための1分間チャット」

1学年の言語活動のゴールは、「『より長く豊かに会話するために必要なことは何か』について考え、ペアで1分間対話することができる。」と設定している。

1学期3学期には、生徒達は以下のような会話をを行った。

### 【対話例】

A: I'm a member of the soccer club.

Do you like soccer?

B: Yes, I do. It's exciting.

Who is your favorite soccer player?

A: I like Kagawa. Do you know him?

B: Yes, but I like Nagatomo, too.

A: Oh, he is very cool.

Did you watch a soccer game yesterday?

B: No, I didn't, because I read a book.

A: Oh, what's your favorite book?

B: I like comics.

A: Me, too. Uh ...

B: Uh, I usually read JUMP.

このように、生徒があるテーマをもとに楽しそうに対話をしている姿は、教師にとっても生徒にとっても憧れの1つである。そのためには、生徒が3年間でどのような力を身につけ、どのような流れで学習を進めていくかを教師が明確に把握している必要がある。

ここでは、1学年のチャット（生徒同士、または生徒と教師が対話する活動）をどのように指導してきたかを紹介し、生徒が1年間でどのような力を身につけたのかを紹介する。

第1段階：「モデルを示す」

【4月】

生徒にゴールを示す際、大切なことは「生徒に具体的なゴールをイメージさせること」である。そこで、1学年の4月の初めの授業で上級生が1年生のときに実際に仲間と1分間対話をしているビデオを紹介した。そうす

ることで、生徒は1年後のゴールを確認することができたとともに、「1年後には、自分も上級生のように会話ができるようになりたい。」と英語学習に対する意欲を高めた。

第2段階：「会話をするために必要な語彙を身につける」

【5月】

1学年の入門期において問題となることの1つとして、「生徒の頭の中に話したい内容があっても、それを英語でどのように言えばいいかわからない。」



写真：対話する上級生の様子

ということがある。よって、1学年の早い時期に自己表現に役立つ語彙を増やすために「自己表現お助けシート」という表現リストを渡し、繰り返し語彙や表現を暗記する練習を行った。このドリル活動は3年間、継続的に行い、生徒の発達段階や話すテーマ、学習する言語材料に応じて、必要な語彙や表現が少しずつ定着するよう表現リストを与えた。また、語彙や表現の内容も教科書にあるものだけでなく、生徒が実際に使用するであろうものを選び、表現力の幅がより広がるようにした。

なお、1学年で生徒が使用した表現リストは次ページにある表の通りである。

第3段階：「会話にもう1文プラスする力を身につける」

【9月上旬】

これまで、相手の質問に対して1文のみで答える生徒がほとんどであった。2文以上の英文で応答できるようになれば、話し手は聞き手により多くの情報をつたえることができるようになり、会話もより発展したものとなる。

そこで、教科書で相手の質問に対して2文以上で答えることのよさに気づかせ、その気づきを力として定着するように、生徒にも相手からの質問に対して2文以上で答えることを目標とした活動を行った。

表：1学年の生徒が練習する年間表現リスト

使用時期	身につけたい表現・力
5月上旬	自己紹介やbe動詞を用いた他人紹介で使用する表現。
9月下旬	“hard” や “after school” などの副詞（句）表現。5月に学んだ自己表現により詳しい説明を加えたり、後に行うQA活動の答え方に関する表現を身につけたりする。
10月～12月	①～③相手に質問したり、その質問に回答したりする表現。1問1答を流暢に行うことができるようになったら、回答にもう1文付け加えて答えることができるようにする。
1月下旬	“get up” や “watch ~ on TV” など1日の生活に関する表現。後に学習する過去形を用いた表現で使用する表現を学習する。

活動内容は以下の通りである。

**【活動内容】**

- ①生徒全員が起立をし、教師からの質問に答える。
- ②教師からの質問に1文で答えることができたなら、その生徒は着席する。2文以上で答えることができたなら、前後左右の生徒も座ることができる。
- ③3分間時間を計り、クラスで何人座ることができたかを毎時間記録する。

このような活動の中で、生徒は次のような対話を行うようになる。

**【会話例①】**

教師：Do you like sports?

生徒：Yes, I do. I like baseball.

**【会話例②】**

教師：Are you a member of the tennis club?

生徒：No, I'm not. I'm a member of the soccer club.

**【会話例③】**

教師：What do you do at home?

生徒：I listen to CDs. I want a new CD.

この活動を約3週間継続的に行った。また、この3分間の活動後には振り返りの時間を設け、どのような付け加えの文が応答としてより豊かな表現となっていたかを確認した。このような活動を通して、生徒は教師からの質問に対して2文以上で応答する習慣が身に付くとともに、他の生徒からの様々な種類の応答の仕方を学ぶことで表現の幅を広げることができた。

に、他の生徒からの様々な種類の応答の仕方を学ぶことで表現の幅を広げることができた。

第4段階：「つなげた会話にする①」

【1月】

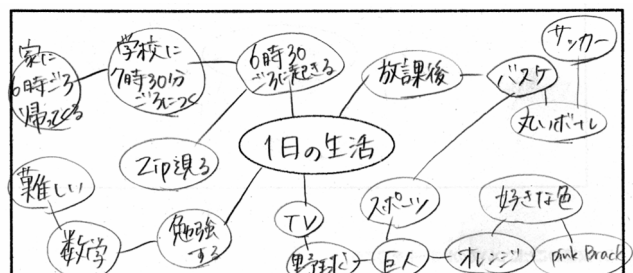
1学年の1月頃から本格的に「生徒同士が1分間あるテーマについて英語で対話する活動」をスタートさせる。これまでは自己紹介など、事前に準備したスピーチ原稿を暗記して発表するか、1つの質問に対して2文以上で応答する対話までしか生徒は活動をしていない。

そこで、長く対話を続けられるように、以下のようなチャット活動を行った。

①話す内容の情報をウェビングの手法でまとめる。

生徒が英語で対話をするとき、どのようなことを話すか頭の中にもっていなければ、対話をすることができない。そこで、チャットを行う前にウェビングを行い、あるテーマについてどのようなことを話したらよいかをワークシートにまとめた。次ページ上にあるウェビングシートはある生徒が書いたものである。

**【自分のこと】**



このウェビングは1年生が書いたものであり、まだまだ情報をまとめる力をつける必要はあるものの、頭にて

てきた情報を意欲的に引き出すことができています。このウェビングシートを足がかりとして、生徒は自分のことを相手に伝えたいという気持ちをもってペアとの対話に臨むことができた。

②ペアで話す内容について相談する。

チャットの導入期なので、生徒はまだまだ即興で相手と話すことは困難を感じている。そこで、1学年では、英語でのチャットを始める前に、日本語を用いてのチャットを30秒程度行うこととした。短い時間のチャットを日本語で行うことで、相手がこの後英語でどのようなことを言いたいかを知ることができ、それによって心の準備をしながら英語でのチャットに臨むことができていた。

③ペアと1分間英語でチャットをする。

日本語でのチャットの後、生徒は英語でのチャットを行う。その際のルールは以下の通り。

- 1人につき、ペンを6本持ち、英語を一言話すたびにペンを机に置いていく。1分以内に6本の鉛筆(ペアで12本)を置くことを目的とする。(ペンを置いた後も会話は続ける。)
- 起立した状態で対話を始め、ペアとの会話に4秒以上の沈黙があったら、着席をして会話を続ける。

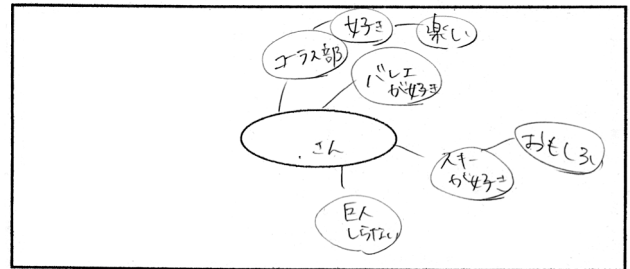
以上のルールを提示することによって、生徒は目的を達成しようと会話を行っていた。ペアでのチャットを行う際には、以上のようなルールを提示することで、生徒はより意欲的にチャットを行うことができるようである。また、以上のルール以外にも、「一度は相手に思わず“Oh, really?”と言わせるような会話をしよう」などのルールを付け加えることで、生徒は新しい視点でチャットを楽しむことができていた。

④相手が話したことをウェビングにまとめる。

1分間のチャットの後、生徒は相手から聞いた情報をウェビングにまとめる。情報をまとめる作業をチャットの後に設けることによって、生徒はチャットの最中にも

「相手はどのようなことを話しているのだろうか」と必要感をもって話を聞くことができる。以下のウェビングは生徒が実際書いたものである。

【2人目の友達こと】



また、ウェビングを書く際に生徒が意識しなければならぬこととして、「自分ばかりが一方的に話をし続けたり、相手に質問しかないということ避けたりすることがある。これらのことをしてしまうことで、自分もしくは、相手がウェビングに書く情報がなくなってしまうからである。ウェビングを書く作業を通して、互いにバランスよく会話をするの大切さにも気づくことができていたようであった。

第5段階：「つなげた会話にする②」

【2月】

英語によるチャットに慣れ親しんだ頃から、「相手の発話に対して、どのような質問やコメントをすれば、かみあう会話になるのだろうか」と戸惑う生徒もいるだろう。そこで、次のような例題を提示し、学級全体で「会話に沿った質問やコメントをするには、どうすればよいか」を考えた。

【例題：次の対話についてどのような質問やコメントができますか？】

A : What did you do yesterday ?

B : I studied English. I did my homework.

A : .....

上に挙げた例題をもとに、生徒は次のような質問やコメントを考えた。

• That's good. [あいづちをうつ]

• How long did you do your homework?

[相手に質問する]

・ Oh, I didn't do my homework !

[自分の意見を伝える]

ここでは、具体的な質問やコメント例を共有することはもちろんのこと、「あいづちをうつ」、「自分の意見を伝える」など、その英文がもつ言語機能面にも注目していた。言語機能面に注目することにより、生徒は共有した質問やコメントをより考えやすくなり、後の会話に生かすことができていた。

[第6段階：獲得した知識や会話技術を自分の力とする]

1学年の最後に、生徒2人組によるチャットがどれだけ上達したかを確かめるスピーキングテストを行った。

スピーキングテストの方法は、以下の通りである。

[テストの方法]

- ①生徒2人1組をつくる。
- ②2人組で5分間、事前にどのような対話を話すかを日本語と英語を用いて相談する。
- ③教師の前で1分間事前に相談した会話の流れを意識しながら、生徒同士で対話をする。

このスピーキングテストで、生徒達は冒頭で紹介したような対話を行うことができた。

すべてのペアでこのような対話が見られたわけではないが、少しずつ会話の流れを意識した質問やコメントをしようとする生徒が増えてきていることも事実である。今後もこのような言語活動を繰り返し行い、より多くの生徒がより長く豊かに会話する力をつけることができるようにしていきたい。

## 【実践例②】 2学年後期前半

- 1 表現活動：Multi Plus 3 わたしの町  
～「思わず富山に来たくなる」紹介文を作るには?～
- 2 言語活動を通して身に付けさせたい力
  - ・ 仲間の作った富山県の紹介文をもとに、富山県のよさがより伝わる表現について気づき、そのよさを理解す

ることができる。

- ・ 既習表現や仲間の表現から学んだことをもとに、自分の紹介文がよりよく富山県を伝える英文になるよう推敲できる。

## 3 指導の実際

### 1) 課題

外国人観光客向けの富山県紹介ポスターに紹介文を3文載せる。「思わず富山に来たくなる」にはどう表現すればいいだろうか

### 2) 課題設定の時期について

2学年後期前半に接続詞の学習を終えた生徒たちは、英語で自分の意見や考えを述べるのみにとどまらず、それに理由や説明をつけることができるようになる。わずか3文であっても、さまざまな既習表現を効果的に用いることで、相手により「伝わる」ということを実感させたいと考えてこの時期を選んだ。

### 3) 言語活動の実際

- ① 事前に2回程度、授業の最初の10分間で3文スピーチを行う。4人グループを作り、与えられた6つのテーマの中から即興でスピーチを行う。テーマの例としては、「日本紹介」「一番好きな季節」「週末にしたこと」など。この段階での生徒たちの実態としては、即興で3文は話せるものの、内容的には深まりのないものが多い。単に時系列に並べている、文と文のつながりがない、具体がない、などである。特に「○○紹介」というテーマに関しては、何を言ったらいいのか分からない、わずか3文だからこそ、何をどう表現すればいいのか迷う、という感想を述べる生徒が多かった。この活動を行う前は、わずか3文ならスピーチできるととらえていた生徒も、実際やってみると自分の思うことが英語を介して思うように伝わらない、もっと効果的な伝え方を知りたい、という欲求をもつようになっていった。

〔生徒作品例①〕「富山紹介」

- I live in Toyama
- It's a beautiful city. • I like it.

〔生徒作品例②〕「東京紹介」

- Tokyo is a nice city, because it's a beautiful city.
- It has a lot of people.
- So I like Tokyo.

② 本時では、外国人が「思わず富山に来たくなる」富山県紹介のポスターを作ろう、という場面設定をすることで、どのような表現を使って紹介文を書けば、相手を惹きつけることができるのかという必要感を持ち、英語の表現上の質の向上に目を向けるのではないかと考えた。また、「話すこと」と「書くこと」を総合的に結びつけ、生徒自身に「書くこと」が「より相手に伝わる」英文を作ること、さらに「話すこと」につながることを実感させようを試みた。

③ 授業の中では

- i) 各自でポスターに載せる富山県紹介を3文で書く。
- ii) 4人グループで紹介文を見せ合い、仲間の作品の表現上のよい点について気付いたことをワークシートに記入する。
- iii) 仲間の作品から学んだよい点について発表する。
- iv) より相手を惹きつけるためには、どんな表現を用いればよいか、全体で確認する。
- v) 仲間の表現から学んだことを取り入れて書き加えを行う。
- vi) 作成した紹介文を4人グループで発表しあう。

〔生徒作品例① (活動後)〕

- Toyama is a beautiful city because it has Mt.Tate.
- I think you will be impressed by the scenery\*.
- Why don't you come and enjoy the scenery with us?

\*基本的に既習表現を用いるよう指導したが、多数の生徒がその表現を使いたいと希望したものは辞書を用いて導入した。

〔生徒作品例② (活動後)〕

- You can enjoy Toyama because it has a lot of

delicious food, for example *Hotaruika and Masunosushi*.

- Nature in Toyama always gives me delicious food.
- You will smile if you visit Toyama.

④ 活動を通して、より相手に伝わる表現のために、つなぎ言葉、対比、誘う表現、強調、具体的事実、例示、自分の体験、理由づけなど既習の多様な表現の中から適切なものを選択したり、さらに文のつながりを意識しながら3文を構成しようと、仲間の作品と比べながら話し合い、学び合う姿が見られた。

## VII 言語活動を行う上での留意点

英語の授業では、2種類の言語活動、習得型の言語活動と活用型の言語活動とのバランスを図らなければならない。input→intake→output という流れに生徒が充分対応できているかという見極めを教師が常に行っていくことが大切である。また両者のバランスに配慮した言語活動という視点を持ちつつ、実際に言語を使用する活動を通して理解を深め、定着させるという考えをもつということも重要である。単元の中のどの部分に時間をかけ、どのような活動を設定するのか、その結果として単元の目標が達成されるように年間指導計画を作らなければならない。

また、「言語の使用場面」と「言語の働き」についても留意すべきである。「言語の使用場面」は学習指導要領において「a 特有の表現がよく使われる場面」と「b 生徒の身近な暮らしにかかわる場面」の2つに分けて示してある。言語活動を行う際には、場面設定が極めて大切である。どこで、だれと、どのような設定で行われている会話なのか、というように、いくつかの要素を複合的に取り入れることで場面設定に広がりをもたせることができるだろう。また、「言語の働き」について、言葉には言語形式が直接的に伝えている意味の他に、その発話によって行おうとする働きが必ず含まれている。学習指導要領では、言語の働きを5つに分類・整理している。その中でも、「情報を伝える」という働きに関しては、その伝え方によって、「説明する」「発表する」「描写する」に分類され、順序立てた説明や筋道を立てた発表な

ど、論理的な思考力が育つような指導が望まれていることを考慮しなければならない。

## VIII 今後の研究

今年度は、英語科における言語活動の明確化を図るために、3年間で育てたい生徒の姿を明らかにし、それに向けての年間指導計画を作成した。言語活動の明確化は、同時に言語活動の充実にもつながるのではないかと考えている。今後は、これらの方向性が正しいのかどうかを検証する必要がある。それには、評価の在り方についても考えていかなければならない。まず学習評価に関しては、それぞれの言語活動の中で、生徒の表現した結果だけを見るのではなく、そこまでの思考・判断という過程を含めた形成的評価を重視していく。そのためにも、今後は各言語活動の充実化をめざした評価基準の明確化をめざしていく。

次に授業評価に関しては、それぞれの言語活動が、3年後の到達ゴールに向けて有機的に機能しているか、教員の自己評価と相互評価が必要である。授業実践の中で、生徒の反応をよく捉え、それを授業展開の修正に活かしていくこと(=指導と評価の一体化)や、各学年の担当者同士で各学習段階における生徒の実態を把握し合い、言語活動への取り組み方や指導計画についても検証していかななくてはならないだろう。

## 〈参考・引用文献〉

- 中学校学習指導要領解説外国語編  
(平成20年9月) 文部科学省
- 中学校新学習指導要領の展開  
外国語科英語編 明治図書
- 幼・小・中学校教育指導の重点  
—一人一人を見つめる—  
平成24年度 富山県教育委員会
- 平成23年度教育研修部調査研究事業資料編 言語活動の充実と学習評価・授業評価—中学校編—  
平成24年3月富山県総合教育センター教育研修部
- 中等教育資料平成23年8月号論説  
「言語活動の充実と外国語の指導の改善—思考力・判断力・表現力を育成するライティング指導—」  
大井恭子
- 思考力・判断力・表現力等を育成する指導と評価Ⅱ  
言語活動の質を高める授業事例集  
2012年3月 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校
- 主体性の高まりをめざして  
—課題学習で学校をつくる—  
富山大学人間発達科学部附属中学校編
- 本校「研究紀要」 第61号、63号



# 第 1 学年英語科学習指導案

1 年 1 組 男子 23 名 女子 17 名 計 40 名

指 導 者 浦 田 栄 信

## 1 題材名 Unit 3 はじめまして、ブラウン先生 (NEW HORIZON English Course 1)

## 2 題材について

本題材は、ALT のブラウン先生が初めて授業に登場するという設定になっている。田中先生がブラウン先生を簡単に生徒たちに紹介したあと、ブラウン先生が自己紹介をする。言うまでもなく、自己紹介とは、初めて会う人などに自分が何者であるかを説明する行動である。すなわち、基本的に自分のことを知らない相手に自分のことを知ってもらうという行為で、自己紹介をきっかけにコミュニケーションが始まると言える。

言語材料としては、like や play などの一般動詞の現在形を用いた肯定文を扱う。日本語では「目的語＋動詞」となるが、英語では「動詞＋目的語」となることから、生徒にはその語順の違いを認識させることと十分な口頭練習が必要となる。一方で、これまでに学んできた be 動詞に一般動詞が加わることで、自己表現の幅を広げる最初の間機となる題材でもあると言えよう。

本時では、「皆の知らない自分を何かひとつ英文で紹介しよう」という課題のもと自己紹介を行う。中学校入学以来、楽しく英語の授業を受けている生徒たちの「英語を話したい」「英語で自分の言いたいことを伝えたい」という思いは強い。しかし、単に「英語で自己紹介しよう」というような設定では、既習の語彙のみをやりくりした型通りの自己紹介となってしまう可能性が高い。一方で、本時の課題のように皆の知らない自分を紹介しようとする、生徒は行き詰まってしまうと思われる。既習の語彙には限りがあり、本当に伝えたい自分のことを伝えられないかもしれないからである。

そこで、毎授業のウォームアップ的な活動として実施してきた辞書の活用を一助として、未習の語彙を用いた自己紹介文を作成することとした。自分の好きなことや習慣、長所などについて、様々な語彙を使いながら紹介・説明しようとする姿を期待したい。グループ内で発表する場面では、どの人の紹介がどのような点でよかったかについて話し合ったり、辞書で調べた語彙について確認し合ったりする機会も設定した。それぞれの紹介文のよさや発展的表現について考える姿が見られることも期待したい。

そして、本時のあとに控えている ALT への自己紹介を見通し、他の人の自己紹介文にある有効な表現、他の人が辞書で調べた新たな語彙などを利用して、さらに自分の紹介文を洗練されたものにしていこうとする学習姿勢へと高めていきたい。また、外国語の学習に辞書の利用は欠かせない。家庭学習の場だけではなく、授業の場でも積極的に辞書を利用して学習を進める場面を設定することで、辞書に慣れ親しませ、英語学習への意欲を向上させたい。

## 3 題材の目標

- be 動詞（既習）と一般動詞を用いて、自分の関心のあることについての情報を含めた、自己紹介をすることができる。
- 他者の自己紹介を聞いて、その内容や使われている表現を正しく理解することができる。

- 趣味や学校生活について、簡単な質問をしたり、それに答えたりすることができる。
- I like (play) …… の文構造、意味、用法を理解し、表現することができる。
- Do you ……? の疑問文と I do not (don't) …… の否定文について、その形、意味、用法を理解し、表現することができる。

#### 4 全体計画（4時間：本時3／4）

- ① 一般動詞現在形を用いた肯定文の理解と練習・・・1時間
- ② 自己紹介文の作成・・・1時間
- ③ 自己紹介文の発表と推敲・・・1時間（本時）
- ④ A L Tへの自己紹介・・・1時間

#### 5 本時の学習

##### (1) ねらい

- 人の知らない自分を知ってもらうために、辞書を活用した未習の語句も含めた自己紹介文を発表することができる。
- グループ内での話し合いや全体での発表を通じて、自己紹介のために有用な語句や表現について理解を深め、よりよい自己紹介文作成へとつなげることができる。

##### (2) ねらいに迫るために充実させたい言語活動

- 前時までに作成した自己紹介文を発表（暗唱）するための練習を行う。
- 他の人の自己紹介にある未習の語句や表現について、辞書でその意味や発音などを確認する活動を行う。
- グループによる話し合い活動を行い、どのような表現が効果的だったか、その人について新たに知った事実や自分の知らない語句はあったか、自分の自己紹介文に利用できる表現はないかなどについて確認し合ったり、考えを述べ合ったりする。

##### (3) 展開

学 習 内 容	生 徒 の 活 動	指 導 上 の 留 意 点
◆あいさつ ◆ウォームアップ (10)	○英語であいさつをする。 ○英和辞書を利用したワードサーチを行う。 ○ペアで「日本文⇔英文」シートを練習する。	○明るく元気な授業の雰囲気づくりに努める。 ○本時の自己紹介発表につながるよう、十分に口頭練習を行う。
◆課題の設定 皆の知らない『自分』を何かひとつ英文で紹介しよう (5)	○本時の活動を確認する。 ○前時までに作成した自己紹介文を発表（暗唱）できるように、個人で練習する。	○自分のことをより伝えることのできる自己紹介とはどのようなものかを考えさせる。 ○未習の語句が正しく発音できているか、その意味を正確に捉えているかを確認する。

◆課題の確認	○本時の課題を確認する。	○他の人の自己紹介の中にある未習の語句
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">                 他の人の自己紹介の英文の中に、自分の自己紹介に生かせる語句や表現はないだろうか。             </div>	を用いることで、自分の紹介文がさらに自分自身のことを伝えることになる可能性があることに気付かせる。
(1)		
◆課題の追究	○グループ内で自己紹介文を発表する。	○人の知らない自分を知ってもらうため
	○発表者は未習の語句や表現についてカードに記して聞き手に示す。聞き手は、その場で辞書を利用して意味や発音を確認する。	に、辞書を活用した未習の語句も含めた自己紹介文を発表することができる。
		【観察・ワークシート】
	○グループ内での各発表をもとに話し合い、評価する。	○辞書で確認した未習の語句のみに着目せず、教科書に出てくる基本表現が正しく使われているか確認するよう助言する。
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 皆の知らなかったことやその人についての意外な事実が含まれている。</li> <li>・ 教科書の基本表現が適切に使われている。など</li> </ul>	○有効な語句や表現を共有することで、本時の課題解決への意欲を高める。
	○各グループの話し合ったことを、全体の場で発表する。	
	○他の人の使った語句や表現を参考にしながら自分の自己紹介文を見直し、より自分を伝えるものになるよう練り直す。	○グループ内での話し合いや全体での発表を通じて、自己紹介のために有用な語句や表現について理解を深め、よりよい自己紹介文作成へとつなげることができる。
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分の作った英文を、別の表現を使ったものへと変える。</li> <li>・ 自分の作った紹介文に、新たなものを付け加える。 など</li> </ul>	【観察・ワークシート】
		○机間指導を行い、語句や表現を増やしている例を紹介する。
	○数名の生徒が全体の前で自己紹介文を発表する。	○最初に作った自己紹介文からの変容を押さえ、本時の課題解決を図る。
	○次時の予告を聞く。	○次時はA L Tに自己紹介することを伝え、課題意識を高める。

## 第2学年英語科学習指導案

2年1組 男子22名 女子18名 計40名

指導者 岩城 廣和

### 1 題材名 Unit 2 Reading for Communication “A Trip to New Zealand” ～相手に伝わる説明をしよう～ (NEW HORIZON English Course 2)

### 2 題材について

本課では、ブラウン先生と一郎、ベッキーがゴールデンウィークの予定を尋ね合ったり、一郎がニュージーランドへ旅行をし、そこで見たエグモント山やキーウィについての説明をしたりする場面が扱われている。相手に予定を尋ねる活動は、身近な会話でよく行われることであり、これまでに1日の生活や過去のことを伝える表現を学んできた生徒達にとってもなじみやすいものである。また、相手に自分の知っていることや見たことを説明することは、普段の何気ない会話のなかでも行われており、今後、生徒につけさせたい力の1つでもある。

生徒は1学年から表現活動において以下のようなことを意識し、言語活動を行ってきた。

- ・自分が言いたいことを相手に伝える (自己紹介、他人紹介、日記)
- ・相手が話したことにあいづちをする (Oh, I see. / Really? / You like ～.)
- ・相手に質問する (現在の習慣に関する質問)
- ・相手の質問に対して、2文で答える
- ・相手との対話に対して、会話の流れを意識した質問をすることができる

そうすることで、生徒は学年末にはペアで1分間対話を続けることができるようになった。しかし、会話をより豊かなものにするためには、「自分が言いたいことを相手により伝える力」を高めたり、「相手が話したことに対してコメントしたり、感想を述べたりする力」をつけたりすることが大切であろう。話し手が言いたいことをよりうまく表現することができることで、聞き手が話し手の意見から、自分自身の意見や感想をもつようになり、そこからさらなる会話の発展が期待されるからである。しかし、現段階の生徒にそのようなまとまりのある内容を急に話すことは困難である。そこで、この困難な状況を本時の課題とし、生徒に身につけさせたい力の1つである「ある程度のまとまりのある英文を話す」ための準備を行いたいと考えた。

本時で扱う英文では、エグモント山に関する説明がされている。本時では、この英文に書かれている内容そのものを理解するだけでなく、エグモント山のよさを伝えるためにどのような表現が使用されているかを考える場面を設定する。また、そこで気がついた視点をもとに、生徒にとって身近なものなどをどのように伝えたらよいかを考える。このような活動を通して、教科書の英文内容を理解するだけでなく、自己表現の手助けとなるようにしたい。このように、教科書の英文を自己表現の手助け (input for output) と位置づけることにより、生徒は与えられた英文をより主体的に理解するようになるだろう。そして、読む活動と話す活動が統合的に結びつき、生徒のコミュニケーション能力がより高まることを期待したい。

### 3 題材の目標

- ・既習表現を用いて、身近なもののよさを英語で説明することができる。
- ・エグモント山やキーウィについての説明を読み、使用されている表現のよさを理解することができる。
- ・入国審査の場面での問答を理解することができる。
- ・be going to の文の形・意味・用法を理解し、表現することができる。
- ・SVOO の文の形・意味・用法を理解し、それを用いて簡単な対話をすることができる。
- ・SVOC の文の形・意味・用法を理解し、表現することができる。

### 4 全体計画（7時間：本時 5 / 7）

- |                               |                     |
|-------------------------------|---------------------|
| ① 未来表現“be going to ~”の理解と表現活動 | ……………（2時間）          |
| ② 入国審査の流れとSVOOの文の形・意味・用法の理解   | ……………（1時間）          |
| ③ SVOCの文の形・意味・用法との理解          | ……………（1時間）          |
| ④ エグモント山についての説明文の理解           | ……………（1時間）（本時1 / 1） |
| ⑤ キーウィについての説明文の理解             | ……………（1時間）          |
| ⑥ 本課のまとめ活動                    | ……………（1時間）          |

### 5 本時の学習

#### （1）ねらい

- ・既習表現を用いて、身近なもののよさを英語で説明することができる。
- ・エグモント山についての説明を読み、使用されている表現のよさを理解することができる。

#### （2）ねらいに迫るために充実させたい言語活動

教科書の英文を読み、相手に伝わる説明とはどのようなものかを考える。教科書本文を読み進めるなかで気づいた視点をもとに、相手により伝わる説明がどのようなものかを学級全体で考察する。そして、全体で共有したことをもとに、身近なもののよさが伝わる英文を作成できるようにしたい。

#### （3）展開

学 習 内 容	生 徒 の 活 動	指 導 上 の 留 意 点
◆あいさつ ◆ウォームアップ (8)	○英語で挨拶をする。 ○英語の歌を歌う。 ○英語でチャットをする。	○明るく元気な授業の雰囲気づくりに努める。 ○最近学習した未来表現を用いた話題をテーマとすることで、生徒に未来表現を使用する力が定着するようにしたい。
◆課題の設定・把握	○ALTと教師がチャットをしている映像を見る。 ○ALTがなぜ立山に行くことを渋っているかを考える。	○生徒と同じテーマでチャットを行うことで、より関心をもって映像を見ることができるようになる。 ○映像で話している内容だけでは、ALTに立山のよさが伝わっていないことに気づかせることで、必要感をもって次の活動に取り組むことができるようにする。

<p>(8)</p>	<p>○本時の課題を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>「相手によさをより伝えるにはどのような表現をつけ足せばよいか。」</p> </div>	
<p>◆課題の追究</p> <p>(16)</p>	<p>○教科書の新出表現を確認する。</p> <p>○教科書から、エグモント山のよさがどのように伝えられているかを考える。</p>	<p>○単語の意味や特性を考慮しながら、写真を用いて意味を紹介したり、会話の中で新出表現を使用したりすることで、それらの表現の使用場面も理解することができるようにしたい。</p> <p>○教科書で使用されている表現が対象物のどのようなよさを引き立たせているかを考えさせることで、必要感をもって英文を読もうとするようにしたい。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>☆エグモント山についての説明を読み、使用されている表現のよさを理解することができる。 【観察・発表】</p> </div>
<p>◆課題の発展・定着</p> <p>(18)</p>	<p>○これまでに学習した表現をもとに、全体で相手によさが伝わる説明文を作成する。</p> <p>○考える表現の条件を変え、全体で再び相手によさが伝わる説明文を考える。</p> <p>○再び立山についての説明を英語で行う。</p> <p>○次時の予告を確認する。</p> <p>○英語で挨拶をする。</p>	<p>○本時で説明する英文は3文と設定する。</p> <p>○初めに提示する英文を穴埋め形式にすることで、視点を絞って表現を考えることができるようにする。</p> <p>○生徒に提示する英文の条件を変化させることで、段階的に表現力が身につくようにする。</p> <p>○考えた英文のみを共有するのではなく、その英文がもつ言語的機能についても考えることができるようにする。</p> <p>○本時で学習したことのすべては用いることはできないが、1つでも新たな視点で対象物の説明ができるようにしたい。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>☆既習表現を用いて、身近なもののよさを英語で説明することができる。 【観察・発表】</p> </div> <p>○次時はキーウィの文章を読むことを伝える。</p>